



G
A M E

RCGS
立命館大学ゲーム研究センター
Ritsumeikan Center for Game Studies

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research



ゲーム産業生成における
イノベーションの分野横断的なオーラル・ヒストリー事業
EMERGENCE of Industry,
An Oral Historical Research Project focusing on Game Industry

大橋太郎第1回インタビュー前半：生い立ち～電波新聞社入社当時の業務内容

木村 めぐみ

井上 明人

福田 一史

鳴原 盛之

松井 彩子

Taro Ohashi, Oral History (1st, 1): Personal Background and
Early Days at Dempa Publications Inc

Kimura, Megumi

Inoue Akito

Fukuda, Kazufumi

Shigihara, Morihiro

Matsui Ayako

目次

アマチュア無線に興味を持つまでの経緯	3
学生時代：アマチュア無線などの趣味に没頭	8
電波新聞社入社当時の業務内容	16

アマチュア無線に興味を持つまでの経緯

Q：本日はよろしくお願いたします。今日のところは、生い立ちから電波新聞社に就職して、新人時代どんなことやっていたのかまでお尋ねできればと思います。まずは大橋さんの生い立ちをお伺いしたいのですが、大橋さんは何年のお生まれですか？

大橋：1948年。昭和23年の12月6日ですね。

Q：では、もうすぐ70歳ですね。（※本稿の聞き取り調査は2018年11月20日に実施）

大橋：去年に間違えて、近くの飲み屋で「俺、70だからみんなで一杯お祝いしてよ」って常連に言ったら、「お前さん、まだ69だよ」って言われて、1年間違えちゃった。生まれたのは、ここ（※電波新聞社）の近所の芝白金という所で、親戚の家の物置で生まれました。芝白金の三光町だから、キリストの再来じゃないかと思って（笑）。新宿に戸山ハイツっていうのが今もあるんですけど、そこの都営住宅に当たったので、すぐに移っていつぐらいまでだったかな？ 小学校の5年生ぐらいまでは、そこで育ちましたね。

そこでの暮らしが、かなり私に影響しています。戸山ハイツというのは米軍の払い下げで、ベニヤ板とかそういうので二軒長屋を作ったんですね。今は高層マンションになっているんですけど、そこは今思うと、あの辺りは国立病院とか、あとは何て言ったのか、病原菌で悪いことした、ああいう陸軍病院の人たちの巣窟だったんです。そこをアメリカが接收して、箱根山っていう都内で一番高い、小高い山があって、昔の大名の屋敷だった所なんですけど、その跡に建物を建てたんですね、非常に家賃も安くて。

大きくなってから思い返すとですね、そこに住んでる人は非常にユニークな人ばかりだったんです。ピアノの先生とか、外国語が得意な人とかがいて、ちょうど私の家の真ん前に、ネイバーフッドセンターと言うご近所センターがあったんです。そこにアメリカ人の、もう名前は忘れちゃったけど、当時の皇太子様にも教えたような先生がいて、戸山ハイツにいる子供たちは、そこに行かされたんです。ですから、戦後政策のひとつで、まあ、一芸に秀でた人たちを集めてたんじゃないかなあと。うちの親父とお袋は、化学系の研究者だったんです。すぐ庭を隔てた向こうには新聞記者とか、小さな二軒長屋なんですけどメッキを専門にやってる人もいましたね。

Q：メッキは金属のメッキのことですか？

大橋：ええ、金属のメッキですね。そんないろいろな一芸に秀でた人を集めて、何かやって

たんじゃないかなっていう記憶はあります。ですから、近所の子供たちと遊んでいても、その家に行ったりして、いろいろな刺激を受けていましたね。中でも、お母様がピアノの先生で、お父様は大学の教授だったんだけど、僕よりも 1 歳上の仙波まさよしさんという人がいて、彼がものすごくラジオに詳しくったんです。それで私も刺激を受けて、ラジオって何だろうということで、ラジオへの興味からいろいろなことが始まりましたね。

Q：その仙波さんという方は、今はどちらにいらっしゃいますか？

大橋：わからないですね。

Q：たまたま、ご近所にそういう方がいたということですか？

大橋：はい。それで、家のすぐ前の幼稚園に、私は 3 歳ぐらいで入れられたと思うんです。今で言う落ち着いたのいない子で…そういう子を何て言うんですっけ？

Q：ADHD ですか？

大橋：多分それかなと思うんですけど、すぐ帰ってきちゃうんですね。もう家が目の前だから。で、鼻つまみになって自由学園っていう、羽仁もと子と羽仁吉一が作った私立の幼児生活団っていう幼稚園に、なぜか通うことになったんです。それは目白にあったので、当時はトロリーバスで通っていました。理由はよくわからなかったのですが、どうも普通の所じゃ駄目だということで、幼児生活団という所に入って、私の 2 歳下の弟もそこへ入りましたね。そこは割とのびのびした教育をしていて、特に音楽なんかは幼稚園の頃からソルフェージュとかいろいろ教わってまして、それも好きでしたね。

Q：大橋さんのご家族は、今仰った弟さんと、ご両親と 4 人ですか？

大橋：そう、4 人です。それからもうひとつ、幼児期に影響を受けたことがあるんですが、芸能山城組をご存知ですか？ 山城祥二っていう人がやっていた、『AKIRA』っていう僕は見たことがないんだけど、アニメ映画の作曲をした人で世界的に有名なんですけど、それが「大橋力」って書いて「おおはしつとむ」というんです。ちょうど僕と 15 歳違いで、親父の弟です。で、その彼は登校拒否だったんですね。後から聞いたら、高校生の頃に登校拒否して、我々の本家は栃木県の小山市にあったんですけど、兄貴の所で数年間居候をしていました。ちょうど僕が幼稚園の頃から、小学校 5 年か 6 年でその家を転居するまで、ずっと一緒に暮らしていたんです。

彼はとにかく音楽を、フルートをやっていたり、あとは当時はオーディオとはあまり言われていなくてステレオとかって言ってたのですが、そういうものをすごく趣味にしています。7歳ぐらいのとき、小学校1、2年の頃に秋葉原へ連れて行ってもらって、スピーカーや部品の買い物を見たりしていたんですね。今で言うと、その叔父、大橋力の影響もものすごく受けましたね。

幼児生活団の後には、小学校にあたる初等部に入りました。そこは小学校1年から6年までですけど、教育方針は一応キリスト教ベースなんですけど、非常に子供たちの自主性を重視していました。音楽もそうですし、文章を書くこととか、ニワトリを飼って自然に親しむとか。それから理科室があって、好きな子供はそこに入り浸って、理科の先生に放課後になっても何でも質問させてもらえて、何でも教えてもらえたっていうような環境にいたんです。

その頃は、本当にいろいろなものに興味がありました。昆虫採集も夢中になってやっていました。その学校は、今で言うひばりが丘にあったんですよ。ですから、新宿から通うのがたいへんでしたね。

Q：電車で通われたんですか？

大橋：ええ。西武池袋線で、当時は田無町っていう名前の駅だったんです。1人で定期券を買って毎日通ってまして、1クラスが40数人いて、もう本当に小ぢんまりとした学校でした。そこでも先輩とかで、いろいろな趣味を持ってる方がいました。ある人は、周りの畑で土器や矢尻を拾っていて、私もそれに相当凝ってましたので、休み時間になると畑に行かずと歩いて、矢尻を見付けたりとかしていました。

その中でも、先ほど言ったまさよしさんとか、ラジオのことにすごく詳しい上級生がいて影響を受けたんです。それで、彼らがだんだん手ほどきをしてくれて、僕は名前が太郎だから「たろべえ」って言われてたんですけど、「たろべえ、アマチュア無線というのを知ってるか？」って言われたので「えっ？」となって。「とにかく、免許を取れば外国の人とも話ができるんだよ」って言われて、そんな趣味があるのかっていうことで、その上級生と秋葉原まで行って、ちょっと背伸びをしてアマチュア無線の入門の雑誌とか本を買って、通学電車の中で読んだりしていましたね。

Q：小学生の頃から、アマチュア無線の本を読んでいたんですか？

大橋：そうです。もう夢中になっていて、絶対に無線通信士になるんだというのが夢でした。

今の宇宙飛行士みたいなもので、かっこいいですよ、船とかとモールズで通信をしたりして。学校でもそういう映画を見せてくれましたね、『空と海の間』っていうフランスの映画だったんですけど、小学生が家に帰るとポーンとカバンを投げ出して無線機の前に座るんです。実は、そのときに漁船の中で虫垂炎か何かにかかった人がいて救助を求めている。だけど、たまたまその子が電波を受けて話をして、そこからいろんな人たちが救いの手を出してっというような映画なんかを見せられました。僕もね、もう絶対免許を取るんだっていうことが一番の目標になりましたね。

Q：つまり、もう通信士になれる資格、職業の存在自体は小学生の段階で憧れとして持っていたんですね？

大橋：ええ。で、ちょうどその頃にね、アマチュア無線技士の話は漫画なんかにも出てきたんですよ。その無線の免許を持っているというのは、ものすごいステータスだったんです。試験は国家試験ですから国家資格なんですよ。テレビとかでもアマチュア無線のドラマなどをガンガンやっていたので、ちょうど団塊世代の少年少女は無線にもものすごく憧れて、かなりの比率で免許を取ったと思うんですよ、もうとにかく夢中でしたから。

で、これがこの間たまたま出てきたんですけど、小学校4年のときに創作の勉強っていうことで書いていた日記です。

Q；宿題として書いて、先生に見てもらっていたんですね。

大橋：そうそう。これは母親が取っておいてくれたんですけど、とにかく書くのも好きだったんです。この中に、今日のインタビューに関連するものは何かないかなと思っていたら発見しました。（※日記を見せながら）ちょっと読みにくいかもしれないけど、小学校4年のときに、「今日はゲルマニウムラジオを作った。配線は易しかった。」とか何とか書いてあったんです。

Q：すごいですね。鉱石ラジオの作り方が、ここに全部書いてありますね。

大橋：今、私がこういう仕事をやっていて、回路図だとか実体配線図とかっていうのを一生懸命記事に加えているんですが、当時は自分で書いてるんですね。「先生がこんなことわかるはずない」と思うんですが、もう小学校4年のときから図を書いていたんです。やっぱり誰かにこの感動を伝えたいっていう気持ちがありましたし、そういう周りの刺激もあったので、だいたいエレクトロニクスのほうへという進路は、もう決まっていたですね。

Q：かなり早い段階から、将来のことをお考えになっていたんですね。そうしますと、もう秋葉原に毎週とか毎月とか通い出すようになっていたんですか？

大橋：ええ。ちょうど秋葉原に行く都電があったんですよね。今の万世橋の所にいろんな路線がきていたんですけど、私が住んでいた戸山ハイツからは5円で行けました。ですから、5円玉を2枚持っていれば行って帰ってこれるんです。月の小遣いが200円とか250円でも学校が終わってから、まあ学校からは遠かったけど、それでも行って帰ってくるっていうことをやってました。もう7歳のときから、ずっと通いつ放しですよ。

秋葉原には今でも行ってますね。それから、今でもよく覚えているんですけど、当時は部品を買うお金があんまりなかったんです。よくラジオとかを、昔は電信柱の脇に捨てるっていうことがあったので、それを拾ってきてコンデンサーや抵抗、真空管とかを集めて、それでちょっと背伸びした雑誌に載っている回路図を見て無線機を作ったりしていました。

とにかく、まずお金がたまらないと受信機とかが作れませんから、部品集めに専念したんです。部品を取るときには、我が家にあるようなごついペンチでは駄目なんですよ。ニッパーっていう、先の尖った道具じゃないと上手に切れないんですね。もうお店はなくなってしまいましたが、東京ラジオデパートの、ラジオデパート自体は今も残っていますが、その1階に足立工商っていう工具専門店があったんです。

秋葉原に行くと、必ずそこのお店に寄って、僕はまだ背が小さくて1メートルちょっとぐらいしかなくて、工具が並んでる所のニッパーの前で、「ああ、これはいくらためたら買えるのかなあ？」と行って行くたびにじーっと見ていました。そうしたらある日、足立工商のおばちゃんが、「ぼうや、これ、さびてるけどあげるよ」って言われてニッパーをもらったんです。そのニッパーは今でも持っていますよ、もう感動しましたね。

Q：お古をいただいたんですね。

大橋：ええ。もう毎日来て、こうやって覗き込んで見てましたからね。秋葉原では、今でもそういうところがあるんですけど、ちょっと取っつきにくい部品屋さんとか、まあ専門店だからそういうところなんですけど、子供たちに対してはものすごくみんな親切です。やがて、その子供たちは本当に大口のお客さんになる人ばかりなんですよね。会社とかに入ってから、そこから仕入れてくれるっていうことですから。

まあそんなことをしながら、小学生の頃は過していましたね。それから、バイオリンを習わされていたので、これにも少し影響を受けました。母親がピアノの先生をやっていたの

で、僕はバイオリンだっていうことで。今はもう耳がボロボロになっちゃったけど、絶対音感がついたりなんかしたので、後々のゲームミュージックですとか、そういうことを一生懸命やろうっていうことにつながりにはなったのかもしれないですね。

学生時代：アマチュア無線などの趣味に没頭

Q：なるほど、それが後々のDTMとかでも役立ってくるんですね。

大橋：そうですね、それもやりましたね。小学生の頃は、自由学園でも特にひどい子供が4、5人同じクラスにいまして、僕もそのひとりで勝手なことやっていつも先生に叱られたり、電車の中でおしゃべりしたり駆け回って西武電鉄から指名手配を受けたりというようなこともあったんです。でも、まああつちのびのび過させてもらって、だんだんまともになっていきましたね。その小学校は、初等部が終わると男子部と女子部に分かれて、男子部は普通科と高等科っていうのがあるんですね、中学と高校です。で、そのまんま男子部の中学と高校に上がりました。

男子部では、もう趣味とか何かやりたいなっていうことは、本当に自由にできたんですね。例えば、鉄工所でオブジェの溶接をしたり、木工工場とかもありました。ある一室では無線研究所か言って、そこには先輩方があちこちから集めてきた、当時は米軍の払い下げとか、日本軍が使った無線機がありましたね。米軍基地があった時代なので、米軍の兵隊が横流ししたような、まあそんなものとかがあつて。

Q：すぐ近くの立川には、横田基地とかもありますしね。

大橋：立川にもありましたね。それから放送研究会というのがあつて、そっちは無線の人たちとはちょっと別なんですけど、こっちはいわゆるオーディオ、音響関係ですね。僕は両方とも顔を出して、いろいろと教えてもらいましたね。とにかく、やることがもうすごくて、自転車とか車とか、そんなのまで先輩たちは自分で作ってるんです。自転車も自分で改造して車のハンドルを取り付けたりして。「ああ、すげーなあ…」と思つて。

中学生と高校生では6歳の差で、もうこの歳になつちゃうと大したことはないけど、当時はもう大人と子供ですよ。とにかくやることが激しくて、楽器をやっている人たちもいたので、そのトロンボーンを借りてきてパイプでアンテナを作つて、そこから電波を出したりもしていました。無免許で電波を出したもんだから、電波監理局から人が飛んで来た。

Q：そんなことをしたら、当然ですが人が飛んで来ますよね。

大橋：そういうのを見て、カッコいいなと思ったわけです（笑）。そのアンテナは、トロンボーントロンボーンの原理を応用してスライドすると、周波数を合わせることができたんです。「へー、こういう考え方するのか」と思ったりとか、まあそんな環境でしたね。その中学と高校は全寮制なんですね。特に、1年生は全員が寮に入って、子供と大人が同居するような寮だったので、「1年生から6年生だ」って言ってましたね。

Q：中学校と高校も田無町にあったんですか？

大橋：同じ場所ですね。そこで1年、2年の頃は、軍隊の名残もあったのでセミをやらされたりなんかもしましたね。そんな雰囲気もまああったんですが、後から思えばそんなにひどくはなかったですね。相撲を取らされたり、あとは豚とかニワトリの世話とか、朝食は当番になると朝4時に起きて、寮生の全員の食事を用意するとか。それから1年生は風呂当番があって、当時は新聞紙や薪、石炭をボイラーで燃やすんですよ。小さい体でも薪割りもやりましたよ。

Q：風呂だきの当番もあったんですね。

大橋：それでね、だんだん慣れてきて3学期ぐらいになると、裏の畑に行つて芋を頂戴してきて、それをボイラーで焼いたりしていました。それから、食料の倉庫へ忍び込んでメリケン粉の保管箱をトントントントンってやると出てくるの集めて、スコップでホットケーキを作ったこともあります。「醤油をかけたほうがうまいぞ」って言われて醤油をかけたら、いい匂いがするもんだから、上級生が「お前ら何やってんだ」って言ってきたので、「何ですか？ 今、一生懸命に風呂をたいてますけど、ぬるいですか？」とか言って（笑）。そんな雰囲気でもやりましたね。

Q：すごく自由な校風と言いますか、学生生活だったんですね。

大橋：アマチュア無線をやっている先輩もいましたし、それからオーディオでは天才的な人がいっぱいいました。僕がオーディオ関係で一番影響を受けたのは穴澤健明という、日本で初めてデジタル録音をした録音技師です。デンオン、今のデノン&マランツの初代の社長なんですけど、ちょうど僕の入ったときの6年生、高校3年生でした。彼はもう、オーケストラの楽譜を全部暗譜できちゃうし、コンダクティングもできる。その同級生も、レコードを聴いただけでフルオーケストラのスコアを書いちゃうんです。

Q：すごい方がいらっしやっただけですね。

大橋：そういう人たちがスピーカーを作ったり、それを何て言いますか、密閉型にしたりいろんなことをやってるのを見たり、アンプを作って回路を改造するのも見たりして。一方で無線をやっている人たちは、もうみんな自作か軍用機の改造なんです。それを、門前の小僧習わぬ経を読んでということで勉強しました。で、中学 3 年か、中学 2 年のときに免許が取れたのかな？

免許は取ったけど、今度は無線機を何とか作らなきゃいけないので、一生懸命お小遣いをためようと思いました。寮で生活していると金もかかるし、小遣いが決まってるんですよね。そこで一計を案じて、その頃は浦和市の与野に引っ越していたので、家から通うと交通費、定期代がもらえるので、それをためれば 8 ヶ月ぐらいで受信機と送信機の部品が買えると。特に真空管は高かったので、家から通うことにしたんです。そのために、与野の家から学校のある田無町、今のひばりが丘まで、徒歩でも行けないことはないんですけど、20 何キロぐらいある道を、毎日自転車で通っていました。もう必死で（笑）。

Q：定期を買ったことにして、実際には自転車で通って交通費を浮かしていたんですね。

大橋：いえいえ、ちゃんと母親に言いましたよ、「その分をちょうだい」って。与野にあった家は、親父が勤めていた日東理化学研究所という所の社宅なんです。幸いなことに、雑木林の中に家が建っていたので、もうすぐ目がついたんですよ。「あ、あその木に竹竿を一本やって、こっちの木に竹竿一本やれば 40 メートルのアンテナが張れる」って。もう理想的なところへ引っ越したんですね。

それで、一生懸命頑張ってお金をためて、中学 3 年ぐらいのときだったと思いますが、初めて電波が出せたので、交信とかをしていました。ちょうどその時期に、はっきり覚えていないのですが、新潟大震災っていうのがあったんです。学校から帰ってきて無線機をつけたら非常通信をやったので、「いやあ、これはすげーなあ…」と思いました。リアルタイムで状況がわかるので、すごく役に立つんですね。「こう支援してくれ」っていう通信を、それを当時のアマチュア無線家が全部やったんですよ。

もうますます夢中になりましたね。無線機ができたし、気楽なのでまた寮に戻って、高校 1 年生ぐらいになったらもう完全に怖いものなしですから、寮の屋根裏部屋に無線室を作っちゃいました。

Q：それって、もうまさに秘密基地ですよ。

大橋：そうそう。寮も理想的なんですよ。後ろに大きな杉の木があって、学校の中に竹やぶもあるので、でっかい孟宗竹をみんなに手伝ってもらって切ってきてアンテナを作ったら、もうバンバン飛ぶんですよ。この間も、たまたま当時の下級生と会う機会があったのですが、私のコールサインが「JA1NZH」なのをみんな覚えてるんですよ。遠い外国と交信をしているのをみんなで見に来てましたので。

あとはラジオとかオーディオ機器に、みんな僕の声が入ってたので自然に覚えていてね。「このコールサインは忘れられない」って。そういうようなことをやってました。それから高校生になってからは、同級生でオーディオとか音楽好きな人と「ジャズやろうぜ」っていうことになって、高校1年ぐらいの頃に、既に相当才能のあるピアノをやっていた人と、テナーサックスをやっていた人と、あとは半分素人の私がドラムスで、もう1人はベースでカルテットを作りました。

毎日、レコードの耳コピーをしていましたね。ヘタクソなんですけど、音楽室で授業をやっていないときに猛練習してました。ドラムスなんかはまだ買えないから、大太鼓をベースドラムにして、それからクラシックシンバルはトップシンバルにしました。スネアドラムはありましたが、ハイハットがなかったので、「これどうしよう？」とか言ったりしながらやってました。

Q：バンド活動もなさってたんですね。

大橋：いろいろと、かなり自治的な学校で、テナーをやっていた人が会計だったんです。「ちょっと金が余ってるんだよな、どうする？ 浅草に行くと、売れないミュージシャンが楽器を安く売ってる店がある」って言うので、みんなで浅草に行ってハイハットだけを買ってきたんです。

で、ハイハットのシンバルで、パールっていう安いのを買ったら、もうぺちゃん、ぺちゃんて、良い音がしないんです。「もう太郎ちゃん、これだと重たいけどクラシックシンバルでやってみたら？」って言われて、そしたらガッチャン、ガッチャンってでかい音がするんですよ。で、もうしばらく経ったら「また金が余ったよ。じゃあ、トップシンバル買いに行こうか」って言われて、シズル付きのジーンって鳴るやつで、3つくらい外れてるんですけど、それを買って一応は格好がついたんですね。

まあ怖いもの知らずで、いろんな所に出させてもらったりして、高校生とは思えないような面白いことをやってました。桐朋学園という有名な音楽大学がありますけど、ああいうクラシック専門でジャズ禁止の学校の文化祭に呼ばれて、ヘタクソなだけでジャズをプレ

イしたりしましたね。

Q：ジャズが禁止だったというのは、当時の風紀的な問題でってということですよね？

大橋：そうそう。今はもう全然関係ないですけど、当時は不良がやることだって言われていて、その学校はクラシックがメインでしたからね。私たちのグループが手に入れたトップシンバルなんかは、ほかの学生バンドが借りにきましたね。だから、シンバルはレンタルだったんです。「今度どこそこでやるからさ、貸してよ」なんて。でも、今みたいにかっこよくなくて、みんな風呂敷で包んで運んでいました。

Q：風呂敷ですか。楽器専用のケースがなかったんですね。

大橋：ええ、そんなことをやっていました。4歳から18歳、高校3年生まで自由学園にいて、全寮制だったので、友達は全国にいますね。高校1年ぐらいのときから、無線のためと楽器を買うのと、それともうひとつは、友達の所に休みのときに旅に行くためにアルバイトをしてました。

Q：どんなアルバイトされていたんですか？

大橋：最初は乾電池を作る工場です、親父に紹介してもらってね。これはあまりいいバイトではないんですよ、カーボンで真っ黒になるので…。それから配達の仕事もありましたね。今もあるのかな？ お中元とかお歳暮の配達です、クロネコヤマトですね。この実入りが良くて、1個運ぶと15円ぐらいで、それがだんだん上がって行って、最後は車で運ぶと1個30円とか、ビール1ダースは50円とか、もう稼ぎ頭になりましたね。ビールを8ケース自転車に乗せたんですけど、僕は体重がほかの人に比べて軽いので、そういうときはちゃんと後ろのブレーキを掛けといてパッと乗るとか、いろいろ技があるんです。それで潤沢にお金が入りました。

それから、高校でバイクの大型免許も取ったんです。高校2年のときに8,000円で50ccのバイクを買って、北海道まで行ってぐるっと回ったりしていました。名簿を持って歩いて、勝手にその近所の友達の家に泊まって帰ってきましたね。その翌年には125ccに格上げしたので、後ろの荷台にでっかい自作の無線機を積みました。

Q：それもすごいですね。無線機付きのハイテクバイクですね（笑）。

大橋：そうそう。それであちこちで電波を出してましたね。そうやってまあ楽しんでいたん

ですけど、あるときふと世間を見たくなりまして。4歳から高校3年生までの間は、よその世界を全然知らないんですね、自由学園って所にいましたので。「じゃあよし、別の所に行ってみようか」って思って。ただ、受験勉強なんて全然したことがなかったので、どこまで通用するかわからないけど、そのときに東海大学に広報学科っていうのができたので、そこで新聞とかの勉強できるんだなあと思って…。

Q：それで、受験をされたんですか？

大橋：ええ。受験勉強をして、ぎりぎりセーフで東海大学に行ったんです。実は新聞記者にも憧れていたんです。家のすぐ裏にいた新聞記者のおじさんの、何か無頼な姿がかっこよかったんですね。『事件記者』っていうNHKの番組を子供の頃に見て、新聞記者もかっこいいなって思っていました。

それから、当時は伝書鳩で物とかを運んでいたんですが、新聞社専用の無線もあるんですね。ですから南極観測隊、越冬隊なんかは新聞社の無線部の人が行ってました。当時は携帯電話なんて当然ないですから、アマチュア無線で通信をして、それを放送局が録音して、「南極ではこうでした」って放送をするような時代でしたから、新聞社の通信士もかっこいいなと思ってました。

まあそんなことがあったので、広報学科っていうのを受けてみよう。もう高校3年のときには、旅行には行かなかったのかな？ 多分、行っていないですね。

Q：ほかの大学とかも受験をされたんですか？

大橋：いいえ、そこだけです。もうそこしかないなと思ってましたので。今はかなり立派な良い大学になっているみたいですけど、安い大学でしたよ。そこでも趣味のアマチュア無線や、ジャズとかオーディオを当然続けてやっていたんですけど、文学部の広報科に入ってから今でも付き合いがある4人と非常に親くなりました。彼らも非常にユニークな存在だったので、そこでまたひとつの、自由学園とは違う輪が広がったんですね。彼らは全員、東海大学付属高校から上がってきたので、学力を比べたら、こいつらアホかと思うくらい勉強ができない。頭は悪くないんだけど、まああつちのびのびしていたので、「ああ、俺でもなんとか世の中いけるんだな」って思ったりしていました。

Q：大学のキャンパスはどこにあったんですか？

大橋：大根という所です。平塚の近くで、今でもそこにキャンパスがあります。ちょうど大

学に受かったときに、親父が前にいた日東理化学研究所を辞めて、引き抜かれてオリエンタル酵母工業っていうイースト菌を作る会社の研究所長になったんです。で、多少は金があったみたいなので、ちょうどその東海大学で、望星丸っていう海洋学部の練習船があったんです。練習船とは言っても、漁船に毛が生えたようなものですが、ちょうど入った年、大学1年のときに一般学生も参加できる外洋航海をするっていうんですよね。

その話を親父にしたら、珍しく「お前行って来い」って言うてくれました。いくらだったのかは忘れましたが、金を払ってもらえたんです。そのときも本当に面白かったですね。40人ぐらいで、いろいろな知らなかった人たちと航海したんですけど、ちょうどベトナム戦争の真っ盛りで、私はノンポリでしたからね。それがもう面白くて。最初に返還前の小笠原に行ったんです。確か、まだパスポートが必要だったんじゃないかな？

Q：当時は、まだアメリカが統治していたんですね。

大橋：そう。小笠原に行って、沖縄にも行きましたね。そこからずっと、上空を米軍の爆撃機が飛んでる海を下ってマニラに行って、それからぐるっと回ってタイランドに…あ、その前には台湾も、あとは香港にも寄りましたね。沖縄、台湾、それからフィリピンやタイランドに行って、そのまま真っ直ぐ帰ってきたのかなあ、よく覚えていないんですけど。まあ、そういうような体験をさせてもらったんですね。日本の具合がだいぶ良くなった時期で、向こうの学生とも交流ができました。アマチュア無線で適当にしゃべったりしていた経験があり、多少片言でも度胸はあったから

Q：なるほど。ここでも海外と無線で通信をしていた経験が役に立ったんですね。

大橋：みんなに重宝されましたね。その頃は、アマチュア無線に関しては、かなり名前が売れたって言ったらかおかしいんですが、あの世界ではできるだけ多くの国や地域と交信ができる人と、それから一応は免許で出力は決められていますけど、自作の時代だから電波が強い人が、もう世界中で勝つわけです。ですからアンテナも自分で作って、八木アンテナとかあるじゃないですか？ ああいうものを全部設計して作って、10センチでも20センチでも人より高い所へ張るんです。ちょっと高い、指向性の鋭いものを買ったりもして、もう暇があると朝から晩まで、珍しい局を見つけては交信してね。

そうすると、ライバルも当然出てくるんですよ。それから、コンテストっていうのがあるんです。例えば、48時間の中に何局、何ヶ国と交信できたかっていうのを競うんですよ。そうすると、ラッシュになるような周波数帯は避けて、そこでも頭を使って人口の少ない、28メガヘルツ帯っていう、昔は28メガサイクルって言ったんですが、そこで頑張ったりと

かするんですね。で、まあもう時効だから大丈夫でしょうけど、強い電波は送信機の真空管も1本よりは2本、2本よりは4本、電圧も500ボルトよりも800ボルトがいいっていうわけで改造もしていました。

Q：それって、すごい高電圧ですよね…。

大橋：そんなのを四六時中出していると近所迷惑になるので、一瞬で、「This is JA1NZH オーバー」っていうと、向こうはブオーンと返事してくる。そうこうしてるうちに、そういう抜け出た少年たちがだんだんつるむようになりまして。当時は芸能人なんかも、みんなアマチュア無線をやってたんです。特に有名だったのは、亡くなられたんだけど、藤村有弘さんっていうコメディアンですね。タモリさんがやる、各国語でしゃべるネタをやってた人です。

Q：デタラメな中国語みたいなのをしゃべるネタですね。

大橋：そうそう。その元祖の人ですよ。彼なんかにも呼ばれて、川口アパートっていう、芸能人だけが住んでいるアパートに遊びに行ったり、まあそんなことをしてましたね。

Q：そのコンテストは、どこが主催するんですか？

大橋：日本アマチュア無線連盟とか、それからアメリカの連盟とかで、交信記録を出すとそのアワードがもらえるんですね。そんなことばかり夢中になってたので、あまり学校には行ってなかったんです。それで、確か3年生のときにしばらくぶりに学校に行ったら、今でもつるんでいる連中とお昼ご飯を食べながら、「ところで、太郎ちゃんは就職決まったの？」って言われたので、「何、就職って？」って言ったら、「どうするの？ 就職先を選んで決めなきゃ。お前だけだぞ、決まってないのは」って言われちゃったんです。

こりゃあ参ったなとは思ったんですが、就職するなら自分の好きなことに関連した所、やっぱりエレクトロニクス関係って言うのかな？ 無線をやっていたので、それに関連した就職先がいいなと思って調べたら、電波新聞社と角田無線電機っていう秋葉原の老舗の2つしかなかったんです。で、もう面倒だから新聞社でいいかなって。当時のアマチュア無線業界の最高峰の雑誌っていうのは、CQ 出版社だったんですよ。いわゆる技術誌の中で最も部数が出ていて、広告もたくさん入っていた。それで、「CQ とかと比べてどうかな？」と思ったり、「電波新聞社って、そうか、『ラジオの製作』があるのか」って。

Q：CQ は、『トランジスタの技術』を発行していた出版社ですよ？ 当時はもう創刊さ

れた後だったんですか？

大橋：多分、できたかできないかっていうタイミングですね。で、電波新聞社の『ラジオの製作』でもいいか、ということで試験を受けたんですよ。そうしたらね、成績がよかったです。しくて面接のときに、「大橋君、なぜ君は英語がこんなにわかるの？」って言われたんです。ああ、そうか、アマチュア無線をやったおかげかなと思いましたね。

ちょうど出版部と国際部の部長さんが、僕のことを気に入ってくれて取りたがったらしいんです。アマチュア無線雑誌の『CQ ham radio』に対抗して、ちょうど電波新聞社でも雑誌を出そうっていう話があったらしいんですね。「じゃあ大橋君、JA1NZH で名前も結構売れてるし、いろいろな執筆者も探してくれるんじゃないかな？」ということで、出版部に配属されたんです。

電波新聞社入社当時の業務内容

Q：ちょうどタイミング的にもよかったんですね。

大橋：実は入る前から、内定してすぐに今のインターン制度みたいなことで勉強させられていました。それは何かと言うと、要は新聞の拡販、拡張です。最初は東京でしたけど、全国の電器屋さんを回ったら、なぜか僕の成績が1番だったんですね。アマチュア無線をやっている電器屋さんに、「取ってよ」って言ったりして、「ああそうか、意外と僕は物を売ることもできるんだな」というのをすごく体験したんです。

それで、入社してすぐに『ラジオの製作』の編集部と、『HAM ライフ』っていうアマチュア無線雑誌の編集部と、ある程度兼任で仕事を始めました。元々好きだったことですし、物を作ることも好きだし回路図も読めるし、それから無線もわかるしオーディオもかじってましたので、まあとにかく毎日が楽しい。それから当時はいろいろなメーカーができていましたから、最先端の技術を伝えるのも面白かったですね。

特に、『HAM ライフ』を始めたときには、皆川隆行という、当時は週刊誌で「トップ屋」という商売があったんですが、そこでも有名だった人で、藤原弘達と一緒に『創価学会を斬る』っていうのを編集した、伝説の編集者がいたんですよ。彼は、僕よりアマチュア無線歴ではちょっと後輩なんだけど、アマチュア無線に夢中になっていましたので、アマチュア無線の雑誌ができたっていうので、「じゃあ、俺もやらせてくれ」と売り込みに来たんです。

Q：向こうから売り込みに来たんですか？

大橋：ええ。政治関係だけじゃなくて、自分の趣味の分野でも「トップ屋」として、新しくできた雑誌でアマチュア無線界に新風を巻き起こすんだっていう形で入ってきて、私も薫陶を受けたわけです。「とにかく、雑誌記者っていうのは中指にタコができてないと駄目だ」って言われました。それで、「ああ、そうですか」って、指を一生懸命こすったりなんかしてね、かっこつけて（笑）。先生はペリカンの万年筆を持っていて、僕も真似してペリカンの万年筆を買おうと思ったけど、高くて買えなかったですね。

今でこそ外国人も行ってるけど、皆川先生に新宿のゴールデン街に連れてってもらったりもしました。まあ格好だけでも編集者になろうっていうことで、皆川先生はピースの缶を、背広のポケットに2缶入れてたので、私も当然ピー缶ですよ。そんなことをやってましたね。

それから、会社には写真部っていうのがあって、こういった雑誌の写真も全部撮ったんですけど、写真部の先輩や部長がものすごく腕が良くて、道具も超一流のものを使っていたんです。編集者は、写真もフォトグラファーよりもうまく撮れなきゃ駄目だなと、そこでも薫陶を受けました。「こう撮れ、ああ撮れ」っていうのは、編集者がもう絶対に言うべきだと。文章も同じなんですけどね。

写真部の先輩が、新しいニコンFの次のバージョンが出たときに、「太郎ちゃん、俺のを買うかい？」って言われたので、「いくらで売ってくれますか？」って聞いたら、「4万がいいよ」って言われたんですね。4万円って言ったら給料より高いんですけど、「わかりました」って言って買いました。今でもまだ持ってますよ。

Q：カメラが当時の月給より高かったんですか？

大橋：ええ。そうしたら何のことはない、彼はそれを元手に新しいのを買ってたんですね。それでね、レンズの使い方や光線の見方なんかは一切教えてくれないから、取材に同行してくれているときに盗み見て覚えたんです。「ああ、絞りは8だなとか、5.6だな」とか、「シャッター速度はなぜ30分の1にしてるのかな？ ストロボの光を、なんで天井に当ててるのかな？」とか、全部セオリーがあるわけです。そういうのを、会社の中で盗んで、彼らに負けないぐらいの勉強はしました。

Q：ちょっとお話が戻ってしまいますが、回路も読めましたと仰っていましたが、回路がひとつお読みできるようになったのは、小学校の頃から雑誌を読んでいたからですか？ 中学とか高校でも、アマチュア無線などの雑誌はずっと読んでいたんですか？

大橋：ずっと読んでましたね。わかりだすともう面白いんですよ。当時はアナログ時代ですから、真空管なのでごくわかりやすいんですよ。ですから、子供でも十分に理解できたんです。よく見ると、ちゃんと書いてあるとおりなんですよ。真ん中にフィラメントがあって、温めると周りの金属のプレートっていう部分に電子が飛ぶんですよ。電圧かけ過ぎると飛び過ぎるからプレートが真っ赤になってボロっと溶けたり壊れちゃうとか、触るとビリッとくるとか、そういうのは見て体験もできていたので、もう小学校で十分な理解ができたと思います。

実は、『HAM ライフ』は4年ぐらいで終わっちゃったんです。あまりにも張り切り過ぎて、日本アマチュア無線連盟の土地売買が大スキャンダルになったことがあって、それを皆川先生が、「これはいかん」って言って、その場所に乗る込むというので私もついて行ったんです。彼が「登記書を見せてください」と頼んだり、写し、つまり青焼きなんですけども、「写しをくれませんか？」って、向こうと粘り強く交渉するんですよ。

Q：協会まで直接乗り込んだんですか？

大橋：いいえ、役場ですね。それで、「閲覧だけはいいですよ」って、向こうが折れたんですよ。これはもう以前にも話をしたからいいと思うんですが、皆川先生が閲覧用の写しを受け取りに行くまえに、「太郎ちゃん、借りてきたら写真撮れよ。わかったな？」って言われました。撮影は僕のほうがうまかったから、床にピントを合わせておいて、来た瞬間にパシャッと撮って、それを記事に載せたんです。

そうしたら、後から多分聞いたんですけど我が社の社長宛に、当然うちの社長はもう大所高所で上の人とつながってるから、「おたくの大橋君っていう暴れ者がいて、とんでもない記事を載せてくれた」って言われたらしいんです。クレームがついた。「じゃあ、こんなものはやめてしまおう」っていうことで、『HAM ライフ』は廃刊になったのです。まあ僕ががんばっていたつもりだったけど、会社全体からすればそんなトラブルを起こすようなことをやってたらいかんと。初心に戻って『ラジオの製作』の編集部に戻ってということで、移ったんです。

Q：その頃の電波新聞社は、収益の柱は新聞と雑誌ということですか？

大橋：もう完璧に新聞です。当時は、品川区で一番利益を上げたりとかしてね。ちょうどカラーテレビとかが出た時代で、私が入社する手前ぐらいまでは、ボーナスが4回も出てたらしいですから。

Q：それはすごいですね。

大橋：でも、入った途端に2回に戻っちゃったんです。でも、もうすごい勢いでしたよ。どこの家庭でも家電品をいろいろ買いましたし。

Q：高度成長期にまさに入っていくタイミングですね。

大橋：今と違って日本全国に町の電器屋さんがあつて、電器屋さんも儲かったし、非常に世の中の役に立ったと思うんですよね。ただ、出版のほうはそれほどでもなかった。知名度からすると、CQ出版社さんとかオーム社さん、それから誠文堂新光社さんとか、こういう所に比べると見劣りしていたんですね。ただ、僕はやるんだったら一番になりたいとは思ってましたね、皆川先生から薫陶を受けていましたので。皆川先生も、『HAM ライフ』がなくなったんだったら、『ラジオの製作』の世界で何かやろうよ』という話になったんです。

聞き取り調査ワーキングペーパーの一覧表

http://www.iir.hit-u.ac.jp/doc/WPlist_Game.pdf